

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2009年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科異文化コミュニケーション 専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	野田研一 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	環境文学作品のレトリック研究：自然と人間の「交感」の言語学的分析		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	山田悠介 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2009	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、環境文学研究などで自然と人間の「対応関係」を表す概念として注目される「交感」の概念に関する研究である。「交感」は、自然と人間のあいだのさまざまなコミュニケーションを表す概念ともされているが、未だその概念が明確に定義されているとは言い難く、体系的な研究は開始されたばかりである。本研究では、環境文学研究と日本古典文学研究で「交感」について論じた先行研究をまとめ、領域横断的な概念整理を行うとともに、言語学的文学研究の理論的枠組を用いてよしもとばななの環境文学作品に描かれた「交感」の場面を分析し、よしもとが自然と人間の「交感」を反復というレトリックを巧みに用いて描く場合が多いことを論じた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[環境文学] [交感] [レトリック]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究の目的と方法

本研究は「交感」を論じた先行研究を収集、考察し、全体像を示すと共に、実際の環境文学作品において自然と人間の「交感」と呼ばれる場面がどのようなレトリックを用いて描かれているかを明らかにすることを目的とした研究である。この二つの目的を達成するため、本研究では、**文献調査**(環境文学研究と日本古典文学研究の領域で「交感」について論じた文献の調査)と**テキスト分析**(「交感」の場面が描かれた日本文学作品の分析)という二つの方法論を用いて研究を行った。

2. 「交感」の概念の整理

2. 1. 環境文学研究における「交感」

「交感 (correspondence)」は、環境文学研究の領域で特に注目されている概念である。環境文学研究とは、文学における自然と人間の関係に焦点を当てた比較的新しい文学研究の一領域で、環境問題の高まりとともに 1980 年代後半に北米で始まった。日本でも、1990 年代中頃から、英米文学研究者を中心に 18~19 世紀の西洋ロマン主義文学や現代の自然に関する一人称形式のエッセイ (ネイチャーライティング) などを主な対象として研究が進められているが、近年では、日本文学を対象とした環境文学研究の必要性も高まっている。

こうした学問的特徴をもつ環境文学研究において、「交感」は自然と人間の「対応関係」の問題に焦点化され、「人間と自然とのあいだで何らかの関係づけの意識が働く状態、もしくは対応関係が存在する状態」[強調引用者] (野田, 2007, p. 30) と定義されている。日本における「交感」研究の基本文献の一つと位置づけられる野田 (2007) のこの定義からは、前者はあくまで人間が自然と人間のあいだに何らかの関係があることを認識する状態であるのに対し、後者は実際に対応関係が存在している状態であるということが分かる。すなわち、深度の異なる二つの自然との関わり合いが「交感」と呼ばれているということが含意されているのである。実際、野田 (2007) の挙げる「交感」の具体例で、前者の状態に該当すると考えられるのは、①自然と人間が**呼応**する関係にある場合、②自然と人間が**類似**する関係にある場合、③自然が人間の心情を**象徴**する、あるいは人間が自然に心情を**投影**する場合である。一方、後者は自然と人間が**一体化**するような体験——「主客合一」と呼ばれるような体験——を指しており、①~③と④は明らかに次元の異なる自然との関わり合いであると言える (前者は、自然と人間が別々の存在であるのに対して、後者は、自然と人間は一つの存在である)。これらは同じ「交感」というタームで範疇化されているものの、かなり異なった様相を呈していると言えるだろう。

本研究では、「交感」について論じた文献を調査し、それらの中で「交感」研究の基本文献とされる野田 (2007) を批判的に考察することを通じ、「交感」に下位分類を立てることを提案する。前者のタイプの自然と人間の「交感」を「**照応的交感**」、後者のタイプの自然と人間の「交感」——自然と人間が一者となるような体験で、矢野 (2006) が「**溶解体験**」と呼ぶ人間が自然 (世界) と合一するような体験——を、「**合一的交感**」とそれぞれ名付け、区別する (山田, 2010)。もちろん、こうした分類は絶対的な二分法ではなく、どちらのタイプにも属する「交感」や複合的な「交感」も存在するが、従来の研究で、「交感」を構成する主要な二つの要素である「自然」と「人間」がどのような関係にあるのか、という基本的な問題がほとんど論じられていないことを鑑みると、本研究で行った考察と分類は、今後の「交感」研究の足がかりとなると期待される。

2. 2. 日本古典文学研究における「交感」

前述したように、日本における環境文学研究は現在、英米文学研究者を中心に主にアメリカ文学やイギリス文学を対象に行われている。もちろん、他の研究領域との学際的研究も行われ始めている (e.g. 日本文学研究との連携として 2010 年 1 月に立教大学で行われた国際シンポジウム「エコクリティシズムと日本文学研究—自然環境と都市」などがある) が、現時点での「交感」研究は、あくまで 18~19 世紀のアメリカ文学における「交感」論を中心に行っていると言え、他の領域における「交感」の概念の扱いや位置づけ、用法などに目が向けられることは稀である。こうした現状を踏まえ、本研究では、「交感」が批評上の主要なタームの一つとなっている日本古典文学研究の文献を調査し、「交感」がどのような概念として用いられているかをまとめることで、自然と人間の「交感」という発想や思考が、環境文学研究に限定された問題ではないことを明確にした。

まず、本研究の基礎となる拙著山田 (2009) でも指摘したように、環境文学研究で自然と人間の関係を指す概念として捉えられることの多い「交感」というタームは、日本古典文学研究においては、自然と人間の関係のみならず、人間と人間が融和合一する関係や人間と超自然の存在 (神や仏) との交流を指す術語として用いられており、何らかの二者の同一化や深い交流体験を表す、より広義の概念と認識されている。

もちろん、「交感」は自然と人間の関係を表す概念としても用いられている。和歌や俳諧に代表されるような日本古典文学研究において、「叙景歌」と呼ばれるジャンルが「抒情歌」とは独立して立てられていることもあり、『万葉集』や『古今和歌集』などの和歌研究で、日本古典文学における自然と人間の「交感」の問題が扱われることが多い。大西 (1943) は、『万葉集』で自然の景物に自らの心情を自然物に託して詠う「序歌」という表現形式が確立していたことを指摘し、当時の歌人と自然とが深く交流し、「交感」していたことの表れであると論じている。(なお、大西は本研究で言う「合一的交感」の意で「交感」を用いている)。

研究成果の概要 つづき

また、日本古典文学研究では、「交感」というタームが用いられていなくとも、「交感」的な自然と人間の関係が盛んに論じられていることも分かった。特に『源氏物語』は当時の和歌の思考様式や『蜻蛉日記』の影響を受けつつも、「典型的な型にとどまらず、特定の人間の特定の体験を、自然によって触発される情動とからめて描き始めた」(後藤, 2002, p. 39) 最初の散文文学作品と位置づけられ、作中の自然と登場人物の関係をめぐる多くの研究がなされている。本研究で「照応的交感」と呼ぶ自然と人間の関係は、『源氏物語』研究では「景情一体」と呼ばれ、作中で自然が単なる背景としてではなく、登場人物の心情を表す重要な要素となっていることが指摘されている。中でも武原(1977)は、『源氏物語』における「人事と自然の融合描写」(p. 99)を五つに類型化しており(pp. 100-103)、武原の示した類型は、『源氏物語』のみならず現代の文学作品に描かれる「交感」の場面を分類、考察する場合にも有効な枠組みと考えられる。今後さらなる研究が必要である。

「交感」は、今回調査した両分野に共通する批評用語であるが、それぞれの学問的特徴や背景、歴史性などは異なっている。こうした点を考慮しつつ比較検討し、学際的な「交感」研究を行うことが次の課題である。

3. 「交感」のレトリック分析

本研究では「交感」の概念を整理することと並行して、実際の環境文学作品から自然と人間の「交感」の場面を抽出し、そこに観察される表現上の特徴を分析した。研究の対象として、現代日本を代表する作家の一人で、自然と人間の関わり合いを多くの作品で描いているよしもとばなな(1964-)の小説(7作品)を取り上げ、20世紀の構造主義言語学者ロマン・ヤコブソンの詩学(言語学的文学研究)の理論を用いて分析した。

よしもとの作品で描かれた「交感」の場面を分析した結果、同一または類似する音、語句、構文の反復が顕著に観察された。ヤコブソンは、メッセージそれ自体を志向する言語の機能を「詩的機能」と呼んだが、この「詩的機能」は類似や等価の音韻や語などの連辞軸上の反復や、比喩などが用いられることで強く働き、メッセージを前景化させるとされる(Jakobson, 1960)。その名の通り、伝達を主要な目的とした散文(e.g. 日常会話)よりも詩や韻文(e.g. 標語や諺)で比較的強く働く言語の機能であるが、当然、文学的散文においても反復や比喩はある内容を効果的に表すのにも用いられる。つまり、よしもとは「詩的機能」を強く働かせ、読者の目をひくような技法を用いて「交感」の場面を描いているのである。さらに、同時に行った文献研究で「交感」を二つに分類したが、よしもとはこの分類軸と対応するように、二つのタイプの「交感」の場面を描き分けていた。「照応的交感」の場合には、「交感」する二者である〈自然〉と〈人間〉の記述を反復する(表現形式を等価にする)ことによって両者に「類似」や「呼応」する関係があることを描き出しているのに対し、「合一的交感」の場合も同じく「詩的機能」を強く働かせる反復が多用されているが、「照応的交感」とは異なり、〈自然と人間が溶解・合一する体験〉である「交感」体験それ自体を記述する際に反復を好む傾向があった。

本研究では、「交感」の場面のテキスト分析を行った結果、よしもとばななは「反復」というレトリックを巧みに用いることによって「交感」の場面を作品中に前景化して描き出し、それぞれの「交感」の特徴に合わせてその描き方を変える傾向にあること、この二点が明らかになった。

4. まとめと課題

本研究は、「交感」に関する二次資料と一次資料を、それぞれ文献調査とテキスト分析という手法を用いて分析し、自然と人間の「交感」概念の全体像を示すと共に、日本現代文学作品でそれが描かれる際に一つの型があることを明らかにした。今後の課題は、文献調査の範囲を広げ、「交感」をさらに詳細に検討しつつ、分析を行う作家や作品の幅を広げ、分析の妥当性の検証や反復以外のレトリックの存在を探究することである。

参考文献

後藤祥子(2002)。「源氏物語の自然」増田繁夫・鈴木日出男・伊藤春樹(編)『源氏物語研究集成 第十巻:源氏物語の自然と風土』(39-55頁)。風間書房。

Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 350-377). Cambridge, MA: MIT Press.

野田研一(2007)。「『自然を感じるころ: ネイチャーライティング入門』筑摩書房。

大西克禮(1943)。「『万葉集の自然感情』岩波書店。

武原弘(1977)。「源氏物語の自然描写について—いわゆる景情一体の描写とはいかなるものか—」『日本文学研究』第13号, 99-110頁。梅光女学院大学。

山田悠介(2009)。「日本古典文学における『交感』の概念」『異文化コミュニケーション論集』第7号, 173-180頁。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科。

山田悠介(2010)。「『交感』のレトリック: よしもとばななが描く自然と人間の関係」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 2009年度修士論文 [未刊行]。

矢野智司(2006)。「意味が躍動する生とは何か—遊ぶ子どもの人間学」世織書房。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。